

## 古代東北窯業生産の成立と変遷

著者	渡邊 泰伸
号	18
学位授与番号	217
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/37005">http://hdl.handle.net/10097/37005</a>

わた  
渡なべ  
邊やす  
泰のぶ  
伸

学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文博第 217 号
学位授与年月日	平成18年6月15日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研 究 科 ・ 専 攻	東北大学大学院文学研究科 (博士課程後期3年の課程) 歴史科学専攻
学 位 論 文 題 目	古代東北窯業生産の成立と変遷
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 須 藤 隆 教 授 阿子島 香 教 授 今 泉 隆 雄

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は窯業生産の研究を通して古代東北史の一面を明らかにすることである。古代窯業は朝鮮半島に由来し、須恵器、瓦生産の消長は畿内政権による東北支配の変化を如実に反映していると考えられる。古代の東北は古墳時代の後半から律令国家と蝦夷との拮抗に終始し、両者の力関係の変化がその境界を複雑に変化させた。このことは古代の東北地方に大きな社会的変動と地域の特徴をもたらし現在の東北地方の基盤となった。このような特色を持つ古代東北のほぼ全域にあたる出羽国・陸奥国領域における窯業遺跡を研究の対象とした。

はじめに窯跡の実態を知るため、その分布調査を行い、基礎的資料となる窯跡の集成を行った。これらの窯跡の地理的位置付けを明確にするために東北地方の地域区分を設定し、出羽国、陸奥国に区分し平野、盆地と水系によって細分した。分布調査の結果、古墳時代から平安時代の約700年間に亘る423ヶ所余りに及ぶ窯跡が存在することを確認した。これらの膨大な窯跡を研究対象とし、窯跡の構造と出土遺物を検討し、これらの導入と展開を検証した。

次に、古窯跡研究はこれまで県単位や平野など各地域毎に行われることが多く、東北全域を対象としたものは、無かった。またその年代については古代における辺境という地域性が強く意識され、西日本に比べて新しく位置付けられることが多かった。そこで本研究では東北全体の窯跡と出土遺物を共通する基準で検討し、その年代と供給先を検証する視点を取った。

さらに多賀城、陸奥国分寺などの消長と連動する所用瓦に着目し、年代の把握しやすい城柵・官衙、寺院からの出土瓦を縦軸とし、同時代性の強い瓦窯跡出土資料を横軸にして検討し出羽国、陸奥国における瓦生産の変遷について考察した。

本論文は次の10章によって構成される。

## 序章

### 第1章 東北古代窯業研究の流れ

### 第2章 出羽国南部の窯跡

### 第3章 出羽国北部の窯跡

### 第4章 陸奥国南部の窯跡

### 第5章 陸奥国中央部・北部の窯跡

### 第6章 多賀城創建期前後の瓦生産

### 第7章 陸奥国分寺創建期以降の瓦生産

### 第8章 古代東北の主要遺跡と所用瓦の変遷

## 終章

序章では、古代の東北地方における窯業生産は、西日本と比べ遅れていると考えられた地域的問題点に触れた。古代東北地方の歴史考古学研究は内藤政恒と伊東信雄の主導で陸奥国分寺跡・多賀城跡やそれに関連する瓦窯跡・古瓦研究が先駆的に行われ、汎日本的な視点で論じた。

しかし古代の辺境という特殊性が強調され、畿内からの距離的隔たりは即ち文化的な遅れを意味すると考え、年代観を意図的に新しく位置付けた。

そこで本論では窯業生産の研究を通して東北古代史の実年代に迫ることを一つの目標とした。また日本における窯業生産の始まりと研究方法の変化に触れその年代観の再検討も試みた。

古窯跡研究を進める際に問題となったのは窯跡に関連する考古学用語の不統一である。そのため本論では遺構・遺物の名称を検討し用語に統一性を持たせた。その際に基本とした用語は窯業研究を先導した内藤政恒、伊東信雄、大川 清の研究成果と論考に依った。

第1章では、多賀城跡や陸奥国分寺、官衙・寺院などがどのように理解されていたかを通して東北の古代窯業史の流れを検討した。

最初の窯跡研究としては1918(大正7)年の胆沢城附属の瀬谷子瓦窯跡をあげることができる。1939(昭和14)年には窯跡の先導的研究である多賀城附属の春日大澤瓦窯跡の調査報告が刊行されている。

1970年頃までは、須恵器生産の年代観としては奈良時代以降との位置付けであり、古式の須恵器が出土しても渡来品・伝世品とされた。瓦生産の開始は多賀城成立の8世紀初頭と考えるのが一般的であった。

年代観のターニングポイントは、1975(昭和50)年の大蓮寺窯跡の発見であった。5世紀代の須恵器窯跡の発見は、それまでの須恵器生産の年代観を一変させた。瓦窯跡の調査も進展し、多賀城創建期の木戸、日の出山、大吉山、下伊場野瓦窯跡、さらに多賀城創建期以前の善光寺、大蓮寺瓦窯跡などの調査も相次ぎ、汎日本的な須恵器、瓦の編年とリンクすることが明らかになった。また多賀城など官衙の調査も進展し、瓦窯跡出土資料との比較研究も可能となり、瓦生産をより詳細に把握出来るようになった。

第2章から第5章は、出羽国、陸奥国における窯跡分布論である。

窯跡分布調査の際の地域区分は出羽国、陸奥国の最大版図を基本枠とし、出羽国(南部・北部)と陸奥国(南部・中央部・北部)の5地域に区分した。この5地域の窯跡地名表と分布図を作成し、さらに可能な限り現地調査を実施した。

第2章は出羽国南部を庄内平野、新庄・山形盆地、米沢盆地の3地域に区分し、瓦窯跡13ヶ所、須恵器窯跡71ヶ所余りの遺構・遺物を検討し、あわせて関連遺跡の考察を行った。

出羽国南部の窯業生産は大きく3期の変遷がある。Ⅰ期は8世紀第1四半期で、この時期に米沢盆地の高安瓦窯跡、次いで木和田、味噌根窯跡などが操業し、置賜柵と推定される高畠町小郡遺跡に供給した。瓦生産から見ると出羽国建国期の中心的官衙は米沢盆地に在ったと考えられる。Ⅱ期は8世紀第2四半

期から9世紀第1四半期で、山形盆地南部の三千刈、オサヤズ瓦窯跡群が操業した。また出羽国北部、陸奥国との連絡路の関わりからも山形盆地に出羽国の中心的官衙があったと推定される。この時期には出羽国南部の3地域で、官衙に付属する窯跡が操業した。Ⅲ期は9世紀第2・3四半期以降で、庄内平野の周縁丘陵に大規模な窯跡群が形成され、城輪柵(出羽国府)とその関連遺跡に須恵器を供給した。嘉祥3(850)年の大地震後に泉森瓦窯跡、泉谷地瓦窯跡で城輪柵の瓦が焼成された。山形盆地でも9世紀第3四半期に平野山瓦窯跡で城輪柵跡出土瓦と同様式の軒瓦が焼成された。しかしこの瓦が葺かれた官衙は不明であり、その発見と城輪柵跡との関係が課題である。9世紀後半以降は出羽国南部すべての窯跡で赤焼土器が焼かれ、古代窯業生産は変質し終焉を迎えた。

第3章では、出羽国北部(能代・秋田平野、本荘平野、横手盆地)の瓦窯跡3ヶ所、須恵器窯跡47ヶ所と、律令支配域外であった津軽平野の須恵器窯跡38ヶ所余りを検討した。この二つの地域に分布する窯跡はその供給先を異にする。

出羽国北部では、城柵・官衙などを主たる供給先とする窯群が造られた。8世紀第2四半期に横手盆地南東部窯跡群の竹原、末館窯跡が操業し、盆地の南半域に須恵器を供給した。次に8世紀第2・3四半期に横手盆地北西部窯跡群が操業を開始し、秋田平野でも手形山窯跡、新城瓦窯跡群、添川瓦窯跡群が造られた。新城・添川瓦窯跡群では秋田城Ⅲ期の瓦を焼成した。

9世紀第1四半期になると、横手盆地に造営された払田柵を主たる供給先として、須恵器が焼成された。さらに払田柵からは瓦が出土し、この瓦は秋田城の瓦生産と連動した可能性が考えられる。またこの時期に本荘、能代平野でも須恵器生産が始まる。

出羽国北部の須恵器生産には、末館窯跡出土坏蓋からみて上野系工人の関わりが考えられる。

瓦が葺かれた官衙は秋田城跡と払田柵だけであり、検出された瓦窯跡は8世紀後半に操業する秋田城附属の新城・古城廻瓦窯跡が知られているだけである。秋田城創建期瓦窯跡と払田柵の瓦窯跡が不明でありその解明が待たれる。また秋田城跡出土瓦のうち、軒平瓦については不明であり、払田柵跡からも軒瓦は出土せず、南部とは瓦生産のあり方が異なると考えられる。

北部域は8世紀前半代に成立した秋田城を軸として展開した地域で、建郡当初から蝦夷との確執が繰り返された。それに伴う城柵・官衙の盛衰と窯業生産の操業とは連動していたと推定される。

津軽平野の五所河原南東部丘陵窯跡群は、9世紀後半に持子沢窯跡で須恵器を焼成した。次に前田野目窯跡群が操業し10世紀中葉まで継続した。本窯跡群の須恵器は米代川以北や北海道のオホーツク海に面した常呂町などからも出土し、さらに宗谷海峡を渡った可能性も指摘されている。すなわち、この窯跡群は能代市十二林窯跡の影響で造られ、蝦夷と呼ばれた人々が北を視点に据え操業した窯跡群と考えられる。

第4章では、陸奥国南部を白河・須賀川盆地、郡山、福島、会津盆地、いわき、相馬平野の6地域に区分し瓦窯跡46ヶ所、須恵器窯跡76ヶ所の遺跡を検討した。

南部では6世紀初頭に白河・須賀川盆地の泉崎・釜池窯跡で須恵器生産が行われた。次に相馬平野の善光寺窯跡で6世紀第4四半期に須恵器、7世紀第2四半期以降は黒木田遺跡に供給する瓦を焼成した。7世紀第2・3四半期になると福島盆地でも城裏口瓦窯跡で腰浜廃寺所用瓦が焼成され、福島盆地に初期国府が置かれた可能性が考えられる。

7世紀第4四半期になると、郡衙造営に伴う瓦生産が各地で行われた。白河・須賀川盆地では大岡瓦窯跡から関和久遺跡(推定白河郡衙)に、郡山盆地では麓山・開成山瓦窯跡から清水台遺跡(推定安積郡衙)に瓦が供給された。いわき平野でも梅ノ作瓦窯跡から根岸遺跡(磐城郡衙)と借宿廃寺に瓦が供給され、相馬平野では善光寺、京塚・陳場沢瓦窯跡から黒木田遺跡(中野廃寺)、泉遺跡(推定行方郡衙)、郡山五

番遺跡(推定標葉郡衙)に瓦が供給された。この段階の南部域の瓦当文様には川原寺系の複弁蓮華文軒丸瓦が使用されることが多い。

8世紀第1四半期には会津盆地の村北瓦窯跡と相馬平野の善光寺瓦窯跡で瓦生産が行われた。8世紀後半は東北須恵器生産の大きな画期である。会津盆地に大規模な大戸窯跡が成立し、陸奥国・出羽国の広い範囲を供給圏として須恵器が焼成され、官衙と関連遺跡の需要に応えた。その運営には陸奥国衙が深く関わり、会津の須恵器は精製品として意識された。

9世紀中葉の嘉祥年間には福島盆地で赤植瓦窯跡群が大規模に操業し、腰浜廃寺の大改修に使用された。南部域ではこれ程の大改修がなされた例はなく、この寺は南部域の中心的寺院であったと考えられる。この時期以降は郡単位に須恵器、瓦が生産されたと考えられる。

第5章は、陸奥国中央部と北部を亘理平野、白石・角田盆地、仙台平野、大崎耕土、北上盆地の5地域に区分して瓦窯跡85ヶ所、須恵器窯跡43ヶ所を検討した。中央部には多賀城、多賀城廃寺、陸奥国分寺などの主要遺跡が存在し、多数の窯跡があり、研究が蓄積されてきた。

中央部では5世紀後半に仙台平野の大蓮寺窯跡、6世紀初頭には金山窯跡で須恵器が焼成された。しかしその後継せず、富沢埴輪窯跡、官林埴輪窯跡が調査されているだけである。

7世紀第2・3四半期には、白石盆地で善光寺瓦窯跡の影響下に兀山瓦窯跡が操業し、大畑郡山遺跡(推定刈田評)に供給された。7世紀第3四半期には仙台平野で大蓮寺瓦窯跡A群が、第4四半期には大蓮寺瓦窯跡B群が操業し、燕沢遺跡(推定宮城郡衙)に供給されたと考えられる。僅かに遅れて西台・木戸口瓦窯跡で仙台郡山遺跡(多賀城先行国府)の瓦を焼成した。

大崎耕土でも伏見廃寺、名生館官衙遺跡、南小林遺跡から同時期の瓦が出土したが、瓦窯跡は不明である。8世紀初頭は瓦生産が活況を呈し、土器坂瓦窯跡で雷文縁4葉複弁蓮華文軒丸瓦を焼成し菜切谷廃寺、一の関遺跡の創建期瓦として供給され、多賀城創建期の重弁蓮華文軒丸瓦が補修瓦として使用された。さらに多賀城創建期の下伊場野、木戸、日の出山、大吉山の各瓦窯跡が操業し、黒川郡以北と呼ばれた地域が国府多賀城創建期の瓦生産を担ったのである。

ヘラ描き文字瓦から当初は東海道の下総国、上総国、後には東山道の上野国、下野国さらには陸奥国の富田郡がその負担に関わっていることが分かる。このことは大崎耕土の建郡が進展し、仙台郡山遺跡から多賀城へ国府の移転が可能になった背景がある。また8世紀初頭の須恵器生産は特定の氏族・地域ごとに操業し、建郡を支えた氏族集団との関係が窺える。

8世紀第2四半期には、日の出山瓦窯跡に新しい窯業技術が導入され、地下式無階無段登窯から半地下式無階無段登窯への転換があった。軒瓦の組み合わせも、鋸歯文縁細弁蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦となり、平瓦は1枚作り技法となる。この瓦は東山遺跡(加美郡衙)、城生柵、熊野堂遺跡で使用され、大野東人の出羽国連絡路の建設に伴うと考えられる。

8世紀中葉は仙台平野で陸奥国分寺創建と多賀城Ⅱ期の修造が行われ、台の原・小田原窯跡群で大規模に瓦生産が行われた。この時期に見られる一字刻印文字瓦は陸奥国の郡名、郷名、人名を表し、国衙の直接的な支配下で瓦生産が行われたと考えられる。天平宝字4(760)年の桃生城完成と天平宝字6(762)年の多賀城修造は恵美朝博の主導によるものである。しかし前者は16葉細弁複弁蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦で他に類例がない。後者は重圏文軒丸瓦と単弧文軒平瓦で様式が異なる。

8世紀後半以降になると仙台平野の須恵器は瓦と併焼して生産され、大崎耕土は杉の入裏窯跡、次橋窯跡など小規模となる。会津大戸窯跡が須恵器の主産地となったためと理解される。

瓦生産は、官林、六郎館、代官山瓦窯跡など郡単位の小規模な瓦窯跡で営まれた。またこの時期には律令支配域外である、北上盆地の見分森窯跡で須恵器が焼成された。

8世紀末の多賀城では宝亀11(780)年の伊治公磐麻呂乱で焼失した後の、多賀城Ⅲ期の再建が行われた。そのため早急に復興瓦が必要となり台の原・小田原窯跡群に加えて春日瓦窯跡群も操業する。

9世紀前半には、北上盆地で鎮守府であった胆沢城の重弁蓮華文軒丸瓦と連珠文軒平瓦が瀬谷子窯跡群で焼成された。また陸奥国大地震後の貞観12(870)年に設置された陸奥国修理府による陸奥国分寺の補修には、堤瓦窯跡で焼成された宝相華文軒丸瓦と連珠文軒平瓦が使用された。この瓦は胆沢城所用の瓦を以て、選定したと考えられる。9世紀後半以降瓦生産は衰退し、須恵器生産も小規模になった。

第6～8章は、陸奥国、出羽国における瓦生産の画期と諸段階を論じた詳細編年論の構築である。瓦窯跡とその供給先における瓦の出土状況から、年代的位置付けを行い出土瓦の編年を試みた。

陸奥国の腰浜廃寺の瓦を石田茂作は白鳳期と考え、伊東信雄は8葉単弁蓮華文軒丸瓦を広島県寺町廃寺出土瓦との比較から7世紀後半とし、東北古代史を辺境であるが故に特別視する必要がないとした。その後の瓦窯跡、官衙研究の進展からそれまでの辺境史観を払拭し全国の瓦研究と関連させながら考えることが出来るようになった。

また8世紀初頭が多賀城創建期瓦窯跡群、8世紀中葉の陸奥国分寺創建期瓦窯跡群である台の原・小田原窯跡群の安養寺下瓦窯跡、神明社瓦窯跡など、9世紀後半代以降の五本松瓦窯跡、春日瓦窯跡群などの瓦窯跡が調査され、奈良時代後半以降の瓦生産が明らかになった。

以上のことから陸奥国分寺、多賀城跡、多賀城廃寺所用瓦の変遷を瓦窯跡の視点から検討し、これを基に瓦生産の変遷を5期に区分し陸奥南部を10段階、中央部を12段階に細分した。

第6章は、古代東北の最大造営事業である多賀城創建を最大の画期と考え、これを基準にしてⅠ期の多賀城創建期以前の瓦生産とⅡ期の多賀城創建期瓦生産の変遷を論述した。

Ⅰ期の多賀城創建期以前の瓦生産は導入期で陸奥国南部6ヶ所、中央部4ヶ所、出羽国1ヶ所が知られ、この時期を瓦窯跡とその出土遺物から2段階に細分した。

1段階の瓦生産は、陸奥国南部のいわき・相馬平野、郡山・福島盆地で行われ、中央部では白石盆地、仙台平野にみられる。その地域は、国造制が施行されたと推定される領域と重複する。この時期は7世紀第2四半期から陸奥国建国期と考えられる白雉4(653)年前後と考えられる。腰浜廃寺の瓦生産から、建国初期の国府は福島盆地にあった可能性が高い。

2段階は南部地域で一斉に建郡が行われ、阿武隈川以南ではロストルをもつ地下式登窯と地下式無階無段登窯が使用された。仙台平野には多賀城先行国衙と考えられる仙台郡山遺跡Ⅱ期官衙、大崎耕土には伏見廃寺、名生館官衙遺跡などが造営され、そのための瓦生産が行われた。また会津盆地の村北瓦窯跡と大崎耕土の土器坂瓦窯跡では、同様式である雷文縁4葉複弁蓮華文軒丸瓦が生産されて、工人が交流した。置賜郡の高安瓦窯跡では、型引き三重弧文軒平瓦を焼成した。

Ⅱ期は多賀城創建期瓦生産の下伊場野、木戸、日の出山、大吉山瓦窯跡の分析から、下伊場野瓦窯跡を1段階、日の出山瓦窯跡での2段階を2段階、日の出山瓦窯跡での3段階を3段階とした。1段階は国府多賀城造営の為に大崎耕土に瓦窯跡が設置される。瓦当文様に圏線があり前代の影響を残すが、軒平瓦はロクロ挽き三重弧文軒平瓦から、型引き三重弧文軒平瓦を経てヘラ描き三重弧文軒平瓦となる。平瓦の叩き原体が30個体程あり、多数の工人を集めて製作されたと推定される。同時期の兎田瓦窯跡でも圏線を持つ重弁蓮華文軒丸瓦とヘラ描き三重弧文軒平瓦が組み合う。2段階は日の出山、木戸、大吉山瓦窯跡で大規模に生産し、多賀城、多賀城廃寺に供給した。重弁蓮華文軒丸瓦とヘラ描き三重弧文軒平瓦と同様式の瓦が、南部のかに沢瓦窯跡で焼成されて、関和久遺跡、借宿廃寺の所用瓦となり、さらにこれらの軒瓦は国府系の瓦として陸奥国各地で用いられ、国衙の強い統制を示すものと考えられる。この段階の瓦生産には、上総、下総、上野国や、陸奥国の富田郡が負担を担い、小田郡丸子部建万呂、土師伯嶋、丈

部砦人等在地の有力者が関わった。

第7章では、仙台市安養寺下瓦窯跡と多賀城関連瓦窯跡の分析を通して、陸奥国分寺創建期とそれ以降の瓦生産の時代区分を試みⅢ期からⅤ期に区分した。

Ⅲ期は陸奥国分寺創建期の瓦生産で2段階に細分した。1段階は陸奥国分寺創建期にあたり、台の原・小田原窯跡群の安養寺下瓦窯跡で焼成された。軒瓦は重弁蓮華文軒丸瓦222(多賀城跡出土瓦には多賀城瓦分類番号を付記した。)と偏行唐草軒平瓦620などで、窯体は半地下式有階無段登窯である。時期は天平21(749)年から天平神護3(767)年の間に限定される。2段階は多賀城跡Ⅱ期修造期で窯体はロストル式平窯と半地下式無階無段登窯となる。前者は重圈文軒丸瓦240と単弧文軒平瓦640などで、後者は重弁蓮華文軒丸瓦250と単弧文軒平瓦640を焼成した。年代は恵美朝獺の主導による修造の期間と考えられる事より天平宝字元(757)年から天平宝字6(762)年の間に絞られる。重圈文軒丸瓦と単弧文軒平瓦は大崎耕土の広い範囲にみられ、伊治城造営の神護景雲元(767)年頃まで使用された。

Ⅳ期は伊治公砦麻呂乱後の再建期で台の原・小田原窯跡群と春日窯跡群の出土瓦から、陸奥国分寺、多賀城跡Ⅱ期の出土瓦を細分し2段階に区分した。この時期以降の窯体は、殆どが半地下式無階無段登窯となる。1段階は安養寺下瓦窯跡の第1窯群で重弁蓮華文軒丸瓦320と二重波文軒平瓦650を焼成した。この軒瓦は宝亀11(780)年の砦麻呂乱の直後に再建した多賀城政庁の掘立柱建物跡に使用されたものである。2段階は神明社瓦窯跡C地点と大貝瓦窯跡で、重弁蓮華文軒丸瓦431と細弁蓮華文軒丸瓦313・311、均整唐草文軒平瓦721A・720を焼成し、多賀城政庁の本格的再建の礎石立建物に使用された。

Ⅴ期は貞観11(869)年の大地震後の陸奥国修理府の修復期である。この時期は鎮守府胆沢城造営期、陸奥国分寺再建期から多賀城所用瓦の生産終焉期であり、それを基準に3段階に区分した。1段階はa、b、c小期に区分できる。aは大同3(808)年に造営された鎮守府胆沢城の瓦が、瀬谷子瓦窯跡で焼成された。bは嘉祥(848～850年)のヘラ描き瓦を出土する赤植瓦窯跡群で、腰浜廃寺Ⅱ期修造瓦が焼成された。出羽国で嘉祥3(850)年にあった大地震後であり、庄内平野の泉森瓦窯跡で素弁蓮華文軒丸瓦を焼成し、城輪柵Ⅱ期に供給された。陸奥国南部では共に国府系瓦とは異なる様式となる。cは貞観12(870)年の陸奥国修理府による修造で、陸奥国分寺、多賀城は堤町B瓦窯跡、五本松瓦窯跡で焼成された宝相華文軒丸瓦と連珠文軒平瓦が所用瓦となる。2段階は承平3(934)年に雷火で塔が焼失した、陸奥国分寺の再建を契機として、多賀城跡、燕沢遺跡の大規模な補修が実施され、五本松、安養寺中囲、硯沢、大沢瓦窯跡で大規模な瓦生産が行われた。3段階は古代瓦生産終焉期である。さらに五本松瓦窯跡では僅かに陰刻花文軒丸瓦を補修瓦として多賀城、多賀城廃寺に供給した。これ以降多賀城、多賀城廃寺、陸奥国分寺からは新たな瓦は出土せず瓦窯跡もない。東北地方における瓦生産の再開は10世紀第4四半期の鈴沢瓦窯跡まで待たなければならない。この瓦窯跡は古代瓦生産とは異なり、平泉政権が造ったもので、陸奥・出羽国の伝統的な瓦様式と生産体制を継承したものではなかった。これは古代瓦生産の終焉であり、中世的瓦生産の胎動と捉えられる。

第8章では、5期に区分し南部では10段階、中央部では12段階に細分した。瓦生産の時期区分について陸奥国と出羽国における主要遺跡の瓦出土状況や共伴遺物、文献、関連遺跡の分析から再検討を試みた。1節では陸奥国南部主要遺跡の関和久遺跡、上人壇廃寺、清水台遺跡、郡山台遺跡、腰浜廃寺、根岸遺跡、夏井廃寺、相馬平野では泉廃寺、黒木田遺跡などを取り上げた。2節では中央部・北部の大畑郡山遺跡、角田郡山遺跡、仙台郡山遺跡、多賀城跡、陸奥国分寺、一の関遺跡、伏見廃寺、名生館官衙遺跡、さらには北上盆地の胆沢城にも及んだ。3節では出羽国の城輪柵、払田柵、秋田城を取り上げた。以上の各地域で瓦を出土する主要遺跡の変遷と、出土瓦の内容を詳細に検討し、瓦生産の変遷の中に位置付けた。

4節では陸奥国・出羽国における瓦生産の各時期・各段階における主要遺跡の様相と問題点を検討した。瓦生産Ⅰ期1段階には、陸奥国南部域の福島盆地に陸奥国中心官衙があったと推定され、福島盆地を中心に阿武隈川流域をその領域とした国造制の施行された地域と重複する。

Ⅰ期2段階は仙台平野の仙台郡山遺跡に国衙が造られ、その北端の大崎耕土にも名生館官衙遺跡、伏見廃寺などが造営される。Ⅱ期1段階に多賀城が創建され、2段階には完成し、その支配領域として陸奥国の大枠が確定し、また、出羽国も建国された。3段階には出羽国との連絡路の開削が試みられ、これに関連して大崎耕土の北辺に東山遺跡、熊野堂遺跡など新たな城柵・官衙が創建された。

Ⅲ期1段階は陸奥国分寺・尼寺創建に伴う瓦生産で、2段階は多賀城が最大規模となる大修造が行われ瓦生産は最盛期となる。

Ⅳ期は伊治公磐麻呂乱後の多賀城復興で1段階は暫定的、2段階は本格的再建である。この段階は多賀城だけの復興で陸奥国分寺には修復の跡はなく、多賀城だけが破壊されたと考えられる。大崎平野、郡山盆地では独自の瓦文様を使用した瓦生産が目につく。

Ⅴ期1段階はa～cの3小期に区分される。aは鎮守府胆沢城の成立、bは嘉祥年間の腰浜廃寺Ⅱ期の修造と城輪柵Ⅱ期、秋田城Ⅱ期、弘田柵の瓦が生産された。cは貞観12年の陸奥国修理府による補修期である。

2段階は復興の末期である。3段階は瓦生産の終末期で多賀城跡の他には中屋敷前遺跡だけが瓦葺きで、陸奥国における終焉は10世紀中頃と考えられる。

終章では、各章の内容のまとめを行い、本文を次の3節に要約した。

- 1 陸奥国と出羽国における窯業遺跡の分布と問題点。
- 2 陸奥国と出羽国における瓦生産の変遷。
- 3 古代東北の主要官衙・寺院出土瓦の位置付け。

古代東北の主要遺跡の創建や修造は瓦生産の画期と一致し、5期10段階の瓦生産の変遷と整合する。また東北各地の主要遺跡は陸奥・出羽国の国衙などの、中心的官衙の動向と連動しておりその盛衰は軌を一にすると考えられる。

古代の東北史は畿内政権と蝦夷との拮抗の歴史であった。北へとその勢力範囲を拡大し続けた畿内政権にとって、多賀城や陸奥国分寺などの壮大な瓦葺建物は、蝦夷の人々に目に見える形でその権勢を誇示する、荘厳施設としての働きをした。

瓦生産は技術と共に多大な労力の負担を必要とし、ある地域において瓦生産が開始されたということはその地が瓦生産を担うことに応ずる段階に達したことを意味している。瓦生産の消長はまさに支配の盛衰を反映しているといえる。

本論文では窯業生産の視点から、古代東北史の検証を行った。古代東北の窯業生産全体を同一の基準において分析し、一つの地域として俯瞰し考究したものである。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、須恵器・瓦・塼を生産する窯業遺跡の研究を通し東北地方における古代律令体制の展開過程を解明することを目的とする。その構成は、序章、第1章・東北古代窯業研究の流れ、第2章・出羽国南部の窯跡、第3章・出羽国北部の窯跡、第4章・陸奥国南部の窯跡、第5章・陸奥国中央部・北部の窯跡、第6章・多賀城創建期前後の瓦生産、第7章・陸奥国分寺創建期以降の瓦生産、第8章・古代東北の主要遺



跡と所用瓦の変遷、終章となる。

序章と1章で古代窯業研究史を取り上げる。東北古代窯業研究は1939年に内藤政恒と伊東信雄による春日大澤瓦窯跡の学術調査で開始する。以降、陸奥国分寺跡、多賀城跡など城柵・寺院跡の調査研究が広い視座で進められる。しかし窯業は多賀城創建の8世紀前葉を始点とする見解が定説化する。その背景に東北の文化的遅滞という歴史観があったと指摘する。論者は1975年に5世紀の仙台市大蓮寺窯跡を調査し、年代観を大きく転換させた。この調査を契機に田尻町木戸、松山町下伊場野、新地町善光寺窯跡など重要窯跡の調査と研究が大きく進展したと論ずる。

第2章から5章で窯跡調査資料を集成し、出羽国南部・北部、陸奥国南部・中央部・北部について窯跡分布、立地、構造、遺物組成、様式、技術、年代を検討する。ことに窯跡群別基準を地理的、遺跡構造的に考究し、その基準で地名表、分布図、遺構・遺物の実測図、属性表を作成し、古代東北窯業生産の変遷の把握に努める。

第2章で出羽国南部を扱い、庄内平野、山形、米沢盆地の3地域に細分し、瓦窯跡13、須恵器窯跡71ヶ所を対象とし窯業生産の変遷を3期に編年する。

1期は8世紀第1四半期で、米沢盆地の高安窯跡を最古とし、高畠町小郡遺跡(推定置賜柵)に瓦を供給したと論ずる。2期は8世紀第2四半期から9世紀第1四半期で山形盆地のオサヤズ瓦窯跡群などをあてる。3期は9世紀第2、3四半期で、国府城輪柵所用瓦を焼いた酒田市泉森窯跡群などの変遷と系統関係を検討する。

第3章では、出羽北部の能代・秋田から横手盆地の瓦窯跡3、須恵器窯跡47ヶ所から3期の変遷観を提示する。1期は8世紀第2、3四半期で秋田市手形山窯跡が操業をはじめ、8世紀後半に新城・添川窯跡群で秋田城Ⅲ期瓦が焼成されたと指摘する。3期は9世紀第1四半期で払田柵に瓦と須恵器が供給され、北辺の能代平野でも須恵器が生産される。さらに津軽平野では38ヶ所程の須恵器窯跡が営まれており、ことに五所川原南東丘陵窯跡群が9世紀後半から10世紀中葉に稼働し須恵器が北日本に広く分布する状況から、蝦夷集団との交流を論ずる。

第4章で陸奥南部を白河、郡山、福島、会津、いわき、相馬の6地域とし、瓦窯跡46、須恵器窯跡76ヶ所を検討する。須恵器生産は6世紀初頭に白河の泉崎窯跡で始まる。瓦生産は7世紀第3四半期に善光寺窯跡、福島市城裏口窯跡で開始されたと指摘する。この1期に大岡窯跡で関和久遺跡(推定白河郡衙)、郡山市麓山窯跡で清水台遺跡(推定安積郡衙)、いわき市梅ノ作窯跡で根岸遺跡(磐城郡衙)など郡衙所用瓦が組織的に生産される。こうした関係から窯業の変遷観を呈示する。

会津地方では8世紀初め、村北瓦窯跡で独特の雷文縁複弁様式が生産される。さらにその後半に大戸窯跡群が陸奥、出羽両国に須恵器を広く供給しており、その官窯的性格を論ずる。

第5章で、陸奥中央部の角田盆地、亘理、仙台、大崎地方、北部の北上平野の4地域での瓦窯跡85、須恵器窯跡43ヶ所を検討し、5期の変遷を明らかにする。

中央部では多賀城跡、多賀城廃寺、陸奥国分寺跡などの関連窯跡資料を集成、検討する。仙台平野では5世紀後半の大蓮寺窯、6世紀初頭の金山窯跡で須恵器が生産される。また大蓮寺窯跡が燕沢遺跡の瓦を生産したと指摘する。Ⅰ期2段階には西台・木戸口窯跡で仙台郡山Ⅱ期官衙遺跡の瓦が生産されたことを確認する。大崎平野では8世紀初頭に瓦生産を開始する。会津村北窯跡と同様式瓦が土器坂窯跡で焼成されたことを発掘調査で立証する。

次いで、下伊場野、日の出山窯跡などを取り上げ、多賀城創建瓦生産体制の変遷を追究し、背景として中央部での建郡が進み、生産可能となった動向を指摘する。

Ⅲ期には、8世紀中頃の陸奥国分寺造営、天平宝字4(760)年の桃生城造営や6年の多賀城修造で多様

な瓦様式が郡単位で供給されるようになり、官窯的生産体制が確立したと論ずる。

6章では多賀城造営を東北古代窯業の画期と位置づけ、それ以前をⅠ期、創建期をⅡ期とし、城柵、寺院造営と窯業生産との関係を追究する。Ⅰ期は7世紀第3四半期から8世紀第1四半期、Ⅱ期は8世紀第2四半期と編年する。Ⅰ期1段階の瓦生産は南部で広く、中央部では白石平野で展開し、国造体制との関係が指摘される。Ⅰ期2段階に、仙台郡山Ⅱ期官衙遺跡、名生館官衙遺跡などの造営で瓦生産が本格化したとする。Ⅱ期に大崎地方では下伊場野、日の出山窯跡など3段階の推移が確認される。1段階にⅠ期の様式を踏襲した軒丸瓦が生産され、軒平瓦はロクロ挽きからヘラ描き重弧文に変化する。2段階に日の出山、木戸窯跡が操業する。陸奥南部で同一様式の瓦が生産され、国衙統制の生産体制が展開したと指摘する。

7章は、安養寺下瓦窯跡の総括研究である。窯跡は3群18基で構成され、3段階の変遷を明確にした。古段階は陸奥国分寺創建期で、新たな構造の窯で重弁蓮華文と偏行唐草文瓦が生産される。中段階は多賀城Ⅱ期修造の重弁蓮華文と単弧文瓦が生産された。新段階は780年の伊治公弑麻呂乱で焼失した多賀城政庁修復の重弁蓮華文と二重波文瓦が焼成される。さらにその後の瓦生産の推移を詳細に論ずる。

8章では窯業遺跡の変遷を陸奥南部の関和久、腰浜廃寺、根岸遺跡、中央・北部の仙台郡山官衙遺跡、多賀城跡、大崎地方の一の関、名生館官衙遺跡、菜切谷廃寺、胆沢城などとの関係で検討する。出羽国では城輪柵、弘田柵、秋田城などの調査成果と出土瓦を吟味し、生産体制、供給関係を追究する。こうした検証のうえ、東北古代瓦生産における5期12段階の編年を提示する。

本研究は、論者が長年取り組んできた窯業遺跡の調査成果を総合的に検討するとともに、430ヶ所をこす窯業遺跡の関連資料を精力的に集成、検討し、実証的研究を進めたものである。東北地方の古代窯業について、膨大な窯跡の調査、研究資料と城柵官衙、寺院跡の調査研究成果とを対比検討し、その生産・供給関係、官窯的特質、変遷観を明らかにし、詳細な編年を提示した。

近年の文献史学研究の新たな成果からより総合的検討が望まれるものの、この精度の高い関係資料を総合的に分析した研究は、今後の歴史考古学のみならず、古代史研究の発展に寄与するところ極めて大であるといえる。

よって、本論文の提出者は博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。